

させて頂いたのは終戦直前から、引揚げ後亡くなられるまでの千数百首で、多いとは言えない。が、年代順にこれらの歌をよませて頂くと、私の知らない間にも先生は御病気で入院されたり、御郷里で保養されたりしている。知らなかつたとは言え、御病床を一度もお見舞申し上げなかつたのも、この上なく残念に思う。

御郷里の芦刈村の風物や、福岡市香椎近郊を歌われているものには、特にしみじみした共感が湧き、忘れていた歌心をよびさまされる思いであつた。もう10年、20年生き永らえて、後進の指導をして頂きたかつた。出来ることなら「ガジュマル」に代るものを再び育て上げて頂きたいと思つていただけに、先生の御逝去が惜しまれてならない。

思えば細々とした地味なおつき合いであつた。決して短いとはいえない歳月をとおして、その底から浮かび上つて来るのは誠実、真摯な、燦し銀の様な中島先生のお人柄である。

中 島 さ ん の こ と

森 岡 栄

中島さんが亡くなつたことを聞いた時はガックリ来た。前に笹月清美さんの亡くなつた時も、コリヤイカンと思つたが、今度はもつと身近かであつた。

中島さんと私のおつき合いはアッサリしたものであつた。

台北に赴任した昭和18年の年の暮れに台南方面へ単身旅行した折、当時台南一中で教えておられた中島さんを訪問したのが始まりである。たしかお宅は北門町とか言う所にあつて、お会いした部屋は、蔵書のうずたかい書斎であつた。この時にどんなことを伺つたか全く記憶していない。中島さんは私の訪問それ自体も忘れてしまつておいでであつた。

2回目にお眼にかかつたのは佐賀市の郊外の芦刈村の御自宅であつた。戦後で、殆んど旧制高校、専門学校が新制大学に昇格した年の夏である。

福岡女子大学は1年おくれてスタートしたので、その頃はまだ女専であつた。九州では熊本女専、別府女専が既に4年制女子大に昇格していた。

その年の8月は女大昇格に関して実にあわただしい、そして色んなことの起つた月である。たまたま女子大学の為の新らしいスタッフの英文学関係の先生を何人か御願ひする用件で、当時九大英文科の主任教授の中山竹二郎先生のところに伺つた時、引揚げ後佐賀市で教えておられた中島さんの話しが出て、下條先生の御諒解を得たその足で芦刈村に行つたのである。

中島さんは割合早く承知して下さつたのであるが、奥様が仲々頑強で、もうジイちゃんだから、とか何とか言つて御主人をお離しになりたがらない御様子であつた。が結局奥様からもOKを頂いたのであつた。その折御馳走になつた銀メシの味は忘れられない。貧窮時代であつた。

翌年福岡にお出になつた時は、家がなくて田島の女専の寮に御嬢様と御一緒におられた。私は同時に九大に移つていたけれど、同じく家がなくて、まだ寮に御世話になつていた。そういう訳で、私の家内や、長男などはお嬢様と接することが多く、随分御世話になつたことと思う。私はやたらに忙しくして、時たま御会いする位のものであつた。

女子大学に見えて始めてお書になつた論文はゴールズワージーの悲劇性といったものであつたと記憶している。それまでまとまつた学術的な論文はお書きになつていないようであつたし、又仲々ファイトがあり、文芸的なセンスに満ちているのが、非常に頼もしく感ぜられて大変うれしかつた。

その後、中島さんは千早に移られ、私は屋形原に転居し、女子大で時折御眼にかかる以外は仲々お会い出来なくなつた。

千早の御宅には何度か伺い、奥様にも御眼にかかつたけれど、いつも何かの用事で、それも時間を限つたみたいなあわただしいことであつた。その上、私の用事というのが常にあんまり芳しくない用事ばかりで、全く申し訳ないことであつた。

千早で奥様とお二人で御住いになつていた御部屋はいつもキッチンと片づき、近代文明の粋も揃つており、私は“教授さんは違いますナ、”と軽口をたたいた。

中島さんには大人の風格があり、私などはパッパッしすぎて、相撲にならない所があつた。しかし中島さんは、沢山のお子様を育て上げたあと、何かを期しておられたように感じるのだ。

いつぞや御病気で芦刈村で休養されている時、御見舞に上つて“ゆつくりせかずに休んで下さいヨ、”などと言おうものなら、極まりなく御機嫌ななめであつた。こういうことは、何か、学問上の、又、文学上の新しいアンビションを持たなければあり得ないのではないかと想像する。

誰でも皆アンビションがある。だけど、それをいつまでも持ち続けるということは大変困難である。また世俗的な用事の多くなつた年齢で新しくアンビションを持ち直すということは更に更に困難である。

私が中島さんの御宅に御生存中に伺つた最後も、何か中島さんにとって愉快でない用件であつた。御在宅であつた。私は大てい留守なので、中島さんが大てい御在宅であることは私にとって便利でもあるが不思議みたくもあつた。

例によりあわただしく用件を述べて失礼すると、奥様が下まで御送り下すつた。そして御別れする間に“近頃主人はトテモ元気にやっていますノヨ、”とうれしそうであつた。沢山責任のあるお仕事のために反つて健康によいのであろうか、と思い、ひとごとならず喜んで、帰宅後、女房に報告したことであつた。

それから何週間かあとであつた、おなくなりになつたのを聞いたのは。

中島さんは亡くなつた。しかし、私はかたく信じる、中島さんの秘めた情熱が私たちの心の中に生き続けるであろうことを。それが文学をやるものの約束である。